〔参考文献〕

Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray* (Signet, 1962)
Woolf, Virginia. *To the Lighthouse* (Penguin, 2000)
_____, "Poetry, Fiction, and the Future" in *The Essays of Virginia Woolf, Vol.4*. Ed. Andrew McNeillie (Hogarth Press, 1994)
_____, "Craftsmanship" in *The Essays of Virginia Woolf, Vol.6*. Ed. Stuart N. Clarke (Hogarth Press, 2011)

*　*　*

エルマン，リチャード（大澤正佳訳）『ダブリンの４人』（岩波書店，1993）
谷崎潤一郎『人魚の嘆き・魔術師』（中公文庫、1978）
野崎歓『谷崎潤一郎と異国の言語』（人文書院，2003）

『ドリアン・グレイの肖像』における "Gay / Queer" 的要素に関する一考察*

浦　部　尚　志

序

Oscar Wilde の印象が「同性愛で投獄された唯美主義の殉教者」というイメージに支配されていることは、ほぼ誰もが認めるにもかかわらず、その唯一の長編小説、*The Picture of Dorian Gray*（『ドリアン・グレイの肖像』、1891）は「gay の作品である」と、直に語られても、最初、読者はその意見に、困惑の反応を示す。即ち、作者はどこで Dorian が gay だと表明しているのだろうか、というわけである。しかし、Alan Sinfield によれば、この作品は、「どの点においてもそれを表してはいないが、少なくとも或る読者たちには queer なイメージを喚起させるのだ」という。（103；傍点筆者。以下、欧文からの引用は全て拙訳）

実際、この作品中に同性愛行為への直接的言及は一度もなく、登場人物が裸身を晒すことすらもない。彼らは殆ど常に "gentleman" の身なりをし、Dorian が「罪」を犯したと語られても、そのエピソードは直接関係のない登場人物の口を通して「間接的」に述べられるだけなのである。この点に関し、Dominique Fernandez は、Wilde が「ビクトリア朝の Puritanism に対して支払わなければならなかった代償はそのようなものであった」と断じている（237）し、Dorian が「因果応報（ネメシス）」的に破滅していく結末から、ビクトリア朝の典型的な小説世界の域を出ていないという指摘も数多い。

しかし、それだけで、この問題に対する議論を終わりにしてはなるまい。Wilde が同時代の "Puritanism" に対する「引け目」を感じていたことは認めざるをえないが、*Dorian Gray* を final version へと作り変えるとき、世間の反応を意識し、「語ってはいけないこと」があからさまな箇所に、彼は、慎重に削除と改変を施しているからである。(1) が、一方で、当時の Wilde には同時代の因習に挑戦しようという姿勢が見られ、かつ、「美少年」の話にも取りつかれていた。よっ

て、彼がビクトリア朝的 moralistic な小説世界の枠組みを超えることができなかった、というだけの論は不適切と言えよう。そして、*Dorian Gray* が「gay の作品」であると言われる核心は、「作者が homoerotic な言動を伝えたいのに、それを口に出すのが禁じられたら、それをどのように伝えようとするだろうか？」ということに集約されよう。

また、Wilde は、「芸術の非人格性」を自ら規定しているにも関わらず、(2) 彼の同性愛者としての伝記的細目も無視してはならないであろう。即ち、*Dorian Gray* を書いた頃の Wilde には、「罪の意識」が常に付き纏っていたという指摘があり、それが Dorian 同様、美と官能を追い求めた結果破滅したとされる著者の自叙伝的告白だ、と批評家たちが考える指標ともなっているからである。(3) ――以上の点に留意し、本稿では、Wilde の伝記的側面にも適宜焦点を当てていきつつ、*The Picture of Dorian Gray* という作品全体に、どのように gay / queer 的な要素や特徴が見られるのか、ということを明らかにしていくつもりである。

本論

gay / queer study に取り組むときには、まず当然、流動的な "gender role（性役割〔分担〕)" の問題が考慮されねばならない。――Claudia Nelson によれば、19 世紀末には、「もはや性的枠組み（sexuality）は、一般に、『男らしい（male）／強い（strong）／残念な（regrettable)』対『女らしい（female）／弱い（weak）／賞揚すべき（laudable)』という非性愛（asexuality）な状態では判断されなくなっており〔…〕通常の規範は『自然な（natural）／異性愛の（heterosexual）／好ましい（good)』対『不自然な（unnatural）／同性愛の（homosexual）／卑しむべき（despicable)』ということになっていた」という。(545 – 46) また、Eve Sedgwick は、ビクトリア朝に関する（それも特に貴族階級における）心的枠組みの在り方の一つには同性愛者のイメージが強固に固着しているが、それは Oscar Wilde へと遡り、女々しさ（effeminacy）、異装（transvestitism）、乱行（promiscuity）、売春（prostitution）、大陸のヨーロッパ文化や芸術（continental European culture, and arts）といった事柄で構成されると、断じている。(*Between Men* 173) よって、貴族階級に属するとされる、主人公 Dorian の性的行為と嗜好への理解を深めるには、それらの特性の探究が必要となる。そのため、以下より、これらの点に則して考察が進められて行くことになる。

第 1 に、女々しさ（effeminacy）に関しては、Karl Heinrich Ulrichs の「男性の

肉体に宿る女性の魂（"The soul of a woman enclosed within a male body")」という、gay を規定した有名な描写が喚起される（364）が、Dorian の女々しい（effeminate な）要素を見つけ出すことは容易である。――肉体的描写では、Dorian は死んだ母親に酷似しているし、Lord Henry からは日の光を避けるよう勧告される。彼はすぐに落涙し、ビクトリア朝の女性おぼしく苦悩に直面しては卒倒する。Dorian の唇は緋色で、髪はブロンドである。また彼は、エキゾチックな花や、甘い匂いの香水や、貴重な宝石類という、商品文化における feminine な事物を陳列しては悦に入る。そして、この作品では、戸外よりもずっと多く屋内に、「調度品」という主人公の排他的空間があることも確認できる。ビクトリア朝的「家庭内の天使」という、同時代の女性にとっての典型的な領域が、男性である Dorian の邸内に設定されているのである。また、「公衆への恐れ」を象徴する場所と言ってよい屋内にあるのは、「クローゼット」の装置でもある。彼は自分の肖像画を「屋根裏部屋（アティック）」へと運ばせ、その扉に錠をかけ、全ての窓を閉め、カーテンを引き、その中で衣服にも魅力を見出していく。――以上、Dorian は、イデオロギー的見地からも、婦人のように美化され、部屋に閉じ込もり、人に見つめられ、日光から保護され、自らを美しく飾りたて、innocent な状態にいるようにも促されているのである。

第 2 に、「女々しさ」に関連して「花の象徴」が散見されることも見逃せない。花は、Wilde の唯美主義の最大の特徴のひとつでもある。Wilde が gay 的事象を表すため暗号化した事物の中でも、とりわけ花は重要だと言える。また花は彼の生き甲斐でもあった。(4) この観点からすると、この作品の第 1 章の第 1 行目から読者は圧倒させられる。即ち、多くの装飾がちりばめられた、華美な情景描写に目を眩ませられるのである。(5 ; chap. 1) この場面の描写の徹底ぶりは、彼が初めて長編小説を書くという気負いがあったこと以上に、この作品を一巻本 novel として売り出すときに「美」をより前面に押し出していこうとした戦略が窺える。そして、この場面に「花」が醸し出す強烈なイメージが多く描出されていることは言うまでもない。

このようなパッセージには、自意識過剰かつ over-perfect な文体が採用されている。それは Wilde の作品の多くに見られる特徴であるが、これを Ian Small と Josephine Guy は "purple prose" と呼び、Wilde の Dedadentism の特徴を成すものだと主張している。(193)

この場面の庭園の描写からすぐ連想されるのは、エデンの園の物語である。言うまでもなく、聖書に記された人間の歴史は、最初、そこで Eve が「蛇（Serpent)」

に誘惑された結果、禁断の果実を食べ、知（Wisdom）を身につけるところから始まるのである。この作品も、花咲き誇る庭で、「蛇」とおぼしき Lord Henry が、「人生に関する教義」によって無垢な青年を誘惑し、その「何も知らなかった」主人公が、「生」に目覚めることから、プロットが展開するのである。「ああ！今朝かね！君はその時から生きていたのだよ」（27; chap. 2）、という Dorian に最初の影響を与えた後、Lord Henry が発する言葉は、Dorian が「一人前の人間」として、Adam と Eve のように、「知」を初めて手にしたことを意味する。このように冒頭の長い庭園の描写は、Lord Henry の「悪魔」としての役割を、鮮明に浮かび上がらせているのである。

またここで特に印象的な場面として、Dorian が庭で「大きい涼しげなライラックの花に顔を」埋め、「その香りをワインでも飲むように夢中で吸い込んでいる」箇所が挙げられる。（21; chap. 2）この行為だけで、Dorian の女々しい（effeminate な）性質は容易に感知できる。また、この作品の結末で見ることができるのは、Dorian の「（花のように）萎（しな）びた（withered）」遺体である。（184; chap. 20）再び第 2 章に戻ると、Dorian が Lord Henry に誘惑されている場面の絶頂（クライマックス）では、Dorian がライラックの小枝を落とすと、一匹の蜂が、「深紅のひるがおの、しみのついた花筒のなかへもぐり込む」。（23; chap. 2）ここでは、蜂が花にその針を刺すことで、Lord Henry は Dorian を、象徴的に「破瓜（penetrate）」することになる。そして、両者の性的快感の極致（オーガズム）に引き続き、貞操が汚（けが）されたことも象徴される。（23; chap. 2）加えて、この蜂に関する描写は、我々に gay に関する豊富な着想を与えてくれる。即ち、それは、貫通（penetration）の他にも、授精（insemination）、甘い囁き（honey flattery）、偽装（camouflage）等を我々に連想させるのである。

作者は、花の「永遠の青春と美を有する」性質を特に好んでいたが、このように花は、gay circles において突出して表象される事物である。なぜなら、花は多分に男根的（phallic）なイメージをもち、花弁に蜜をこぼす性質があり、毒をもつことさえあるからである。また、果樹花は両性具有（androgynous）的生殖を行うし、三色菫も同性愛の象徴として良く知られている。また決定的なことに、花を受け取るのは通常は女性、ということになってもいるのだから、Dorian の「女々しさ（effeminacy）」は、ここでも再度理解されうる。

花を通すと、Wilde の古典に対する強い興味をも実感できる。ギリシャの抒情詩において、花はしばしば homoerotic なものの象徴となっているからである。――例えば Dorian は、ギリシャ神話の Apollo や Narcissus にも譬えられている。（178; chap 19 及び、7; chap. 1）Apollo は Hyacinth(us) という美少年を愛したが、

不可抗力で死なせてしまい、彼を花に変身させた。また、Narcissus は、ギリシャ語における両性具有、もしくは、「中性化した性（epicene gender）」を表象する花であるが、その美青年こそ、後世で、自分自身を愛する者の象徴となった。また、花の名をもつ登場人物の Basil によれば、Dorian はとても思慮深くなくなるときがあって、彼が自らの「魂をそっくり」与えてしまったあとでも、Dorian はそれを、「上着にさす花か、虚栄心を満足させる一片の飾りであるかのように」取り扱う。（14; chap. 1）Lord Henry は、Dorian の性質を「深紅の炎のような果樹を付ける」花に譬える（49; chap. 4）し、彼が Dorian に贈った "yellow book" の中には、「蘭のように怪奇な隠喩（メタファー）」も含まれている。（104; chap. 10）Dorian は、Basil 殺害後、花の絵をスケッチする（136; chap. 14）し、Alan Campbell との面談後、召使いに蘭の花を調達するようにも命令する。（144; chap. 14）――結局、花はどれも同性愛的行為と意味深長に結びつけられるのである。

Wilde 自身、「花が無用であるように、芸術作品は無用なのだ。花は自分自身の歓びのためだけに花開くのだ」と、述べている。（*Letters* 292）よって、この作品の中ではまるで全てのものが儚（はかな）く描写されているように思われる。これに呼応するように、「Wilde の作品に見られる consumer modernism の要素は、外面的な装飾と儚い大衆的イメージへと決定付けられる」と、Paul L. Fortunato は主張する。（ix）――かくのごとく、Wilde 作品の醸し出すイメージは、常に「儚さ」が漂っていると言っても過言ではないのである。

第 3 に、Lord Henry が唱道する New Hedonism の考察が gay / queer 的要素の解明に貢献しよう。この「哲学」が Walter Pater の享楽主義（Epicureanism）の思想に恩恵を被っており、それが、Dorian の全体的な性的特徴の賦与に寄与したことを見破るのは容易い。――自らの思想だけでなく欲望までをも、「警句」という形式に託すことにより、Lord Henry は、「同性愛的誘惑」という、当時あってはならなかった筈の咎を巧みに回避する。が、一方で、Dorian はこれらの警句に引きずられるように、現実の行き過ぎた行為に充足を見出していく。(5)

New Hedonism の「現在を楽しめ」（carpe diem）の精神が由来したのは、Walter Pater の *Renaissance*（1873）の Conclusion であることは自明の理だが、その部分は、同作品の第 2 版が出版されたときに削除された。それが、世の「青年たち」を mislead するかもしれないというのが、その表向きの理由であった。Wilde が Pater の Conclusion の精神を込めて創造したと想定される主人公 Dorian も、やはりその精神に mislead されたように見える。そして、Pater の *Dorian Gray* に対す

る有名な書評(レビュー)は、更に白熱した議論を引き起こすことになるのである。(6)

さて、Dorian は、「身体と魂の普遍の結合」というキリスト教的教義を侵犯したから死ななければならないと、現代のキリスト教圏の読者なら考えてもおかしくない。しかし、古典ギリシャ・ローマの時代や中世の読者がこの小説を読んだとしても、彼はやはり "sinful" だと考えられたであろう。Prometheus のように、Dorian は「思いあがり（hubris）」の罪によって、一個の別人格を創造してしまうわけだし、Faust のように、「悪魔との契約」すら交わしてしまうからである。

Dorian が、その人生において真に達成したかったのは、ロマン派の理想だったのではないかと思われる。即ちそれは、「自然において安楽に住まう魂と身体」ということになろう。Dorian の様々な精神的葛藤にそれが如実に表れていよう。

更に、Lord Henry は、Epicurus に対する意図的な誤解をしているとも考えられる。実際、Epicurus の哲学における人生の目的(ゴール)とは、快楽(プレジャー)であるが、それは、心の平穏を達成する手段としてあるべきであって、享楽主義(エピキュリアニズム)は下品な官能肉欲であってはならないのである。けれども、Lord Henry にとっても、Dorian にとっても、これを曲解した上での快楽主義（hedonism）が主張されていると思われるし、それが、Dorian の同性愛的不品行の「都合の良い」正当化として利用されているとも考えられる。そして、「Dorian には、餌を与えれば与えるほどより貪欲になっていく狂乱した飢えがあった」（106; chap. 11）とか、Dorian が「安宿で外国の船乗りと声高に言い争っていた」（118; chap. 11）などという、摑みどころがない上に、露骨に聞こえる表現は、ポルノグラフィー的な gay のストーリーを偽装(カモフラージュ)しているような印象すら与えている。

また Dorian は、自分の体を金で売ったりはしていないが、修辞的(レトリカル)に言えば、最初は悪魔に「魂を売り」、果てには麻薬(ドラッグ)に「身を売っている」とも言える。――「官能によって魂を癒し、魂によって官能を癒す」という、Lord Henry に吹き込まれた言葉を繰り返しながら、Dorian は阿片窟（opium-dens）に向かう。（p. 153; chap. 16）が、実はその場面の彼も、表面上、娼婦（男娼？）を買い(ピック・アップし)に行くことを偽装(カモフラージュ)されているようにも見えるのである。(7)

しかし仮にそうだとしても、リベラルな立場で考察するならば、果たして Dorian は非難されるべきなのであろうか？結婚して家庭内の配偶者と関係をもつべきか、街で行きずりの他人と性行為を行うか、のどちらかを選ぶことの認可拒否をしているのは、社会の方だったのではないか？――19 世紀当時、様々なパートナーと性行為をする人の数は、「結婚」という社会装置によって、急速に減っていた。Michel Foucault によれば、19 世紀英国の様々な現象を追跡していくうち顕著となるのは、全社会的な事業としての一大要請、即ち「性の言説化」であり、ビクトリア朝的 Puritan たちの欺瞞や抑圧ではないのだという。つまり、国家は、現存する英国全体の「権力」を維持するための機構として、「性」を最大限利用した。その結果、子孫を容易に繁殖させることができ、国家の利益となる社会的に認められうる男女の性の結びつき、即ち「結婚」だけを国家は "normal"（正常な状態）と見なし、それ以外の、権力維持にとって不利益となる「精子や卵子の無駄遣い」を "abnormal"（異常なもの）として排除しようとしたのだ、という。(8) ――よって、理想的には、婚外での性交渉はありえないことになっていたのだから、国家の庇護がないのに "Harlot's House" に通う以外、Dorian には何が残されていたというのだろうか？

第 4 は、「Dorian と女性」という観点からの考察である。――散見される Dorian と女性との恋愛沙汰は、実際、gay reading にとっては障害となる。特に、Dorian の最初の「女性の恋人」である Sibyl がそうなろう。また、Dorian と出会う女性の殆どが彼に恋してしまうというプロットすらこの作品中にはあり、それがこの小説における「gay の仄(ほの)めかし」を隠す最大のベールとなっている。しかし、gender line（性の境界線）の揺らぎが、Wilde の諸作品に見られることは既に明らかであるし、gay ／ queer 批評的に考察するならば、Dorian は Sibyl のことを「女性」としてでなく、「少年」として見ていることになる。

Stephen Greenblatt が立証したように、Shakespeare 劇では、gender marker（性標識）と見なされるものは生物学的な性別でも役名でもなく、衣装だけである。（66-93）また、Shakespeare 劇に出てくる女性は、かつて全て男性によって演じられていた。ここに二重三重の queer 的仕掛けが見え隠れするのは自明の理であるが、それがこの小説でも生かされている。――Dorian が観劇に行った最初の夜、Sibyl は Juliet を演じていた。2 日目の夜は Imogen だが、3 日目に演じられていたのは、*As You Like It* の中の、Ganymede (9) という偽名を名乗る、美青年の姿をした Rosalind であった。（48; chap. 4）よって、Dorian が Sibyl に初めて自らを紹介したのは、彼女が男性の衣裳を着た Rosalind を演じ終えたすぐ後のことなのであり、Juliet や Imogen といった女性を「直接」演じた後ではない。すると、Dorian は破滅的にも、「一人の少年」に、恋をしたことと同義であると言ってよいであろう。

以上のことに関連して、Dorian の Sibyl に対するプロポーズの性質についての分析も重要となる。――その行為は果たして誠実だったのであろうか？ Dorian は Lord Henry に言う、「僕はこの結婚を商取引としては扱わなかったんだ」、と。

(66; chap. 6) が、Wilde の喜劇でよく見られるように、結婚という概念をひとつの「商取引」と見なすならば、Dorian は、本当には、彼女と結婚したいとは思っていないことになる。なんとならば、ビクトリア朝における結婚は一種の「ベンチャー・ビジネス」だったと言ってよいからである。よって、Sibyl は Dorian にとって、単純にただ「女性として」大切だったというわけではなくなる。そして、Sibyl に辛く当たり、彼女と別れることになる場面で Dorian が、「芸術が無ければ、君なんて全くの無だ！君を有名に、立派に、素晴らしくしてやりたいと思っていたのに。世間が君を崇拝し、君が僕の姓を名乗るはずだったのに」(74; chap. 7)、と言うセリフも興味深い。Dorian の Sibyl に対する愛情は、盲目的にただ女性を愛するものではなく、彼女を世間の誰もが知る一流女優に仕立て上げたいという、興行主的野望があったとすら言えるからである。

第 5 に、この小説の第 11 章を中心とした分析に移る。――この章は、極めて特異な章である。話術の天才とまで言われた Wilde にしては、会話がひとつもない上に、ここだけで 18 年もの年月が流れてしまうなど、様々な仕掛けが加えられているからである。そして、この章における歳月の間に、Dorian の人生はピークを迎える。また、ここは、作品のほぼ真ん中に位置しており、Dorian の人生を大きく二分する「分水嶺」の役割も果たしている。[10] このように様々に特別な意味をもつと思われるこの章は、gay / queer study 的観点からしても重要となる。

この章で最初に考察されるべきは、「大陸のヨーロッパ文化からの影響」である。中でも顕著なのが、Dorian の旅行癖と、著者自身のフランスびいき (Francophilia) である。――「ギリシャ語を読むのと、フランス語を話すのが、人生を陶冶すること (cultivation of Life) において最大の悦びの二つである」と、Wilde は述べている。(*Letters* 814) また、当時大陸には、同性愛者にとって抗しがたい魅力があった。なぜなら、ナポレオン法典 (Code Napoléon) が、同意さえあれば成人の同性同士の性行為を犯罪の枠から外すことにしていたからである。この点から、Dorian と Lord Henry が、Normandy にある Trouville や、同性愛者のメッカであるフランスの植民地 Algiers に行ったこと (118; chap. 11) や、Dorian に殺害されるとき Basil は Paris へ行く途中であったこと (124; chap. 12) 等が、非常に意味深長に感じられる。[11] 更に Dorian は、同性愛者たちの別の「桃源郷」である Venice で一度、秋を過ごしたことがあるが、そこでは、「素晴らしい恋が〔…〕数々の狂おしい愚行に彼を駆り立てた」とも記されている。(137; chap. 14)

次に、この第 11 章で多弁に示される、ローマ・カトリックの教義にも注目した

い。Catholicism が醸し出すイメージは、Sodom と Gomorrah に関する訓令に始まり、ローマ法王の着るドレスや、ミサの campy な気取り方や、天使の裸像等に見られるように (110; chap. 11)、豊富な queer 的情報を提供してくれるからである。

また、ここでは Dorian がカトリック教団に加わろうとしている噂が広まっているし、聖体顕示台 (monstrance) や、聖職者の法衣 (dalmatic) や、煙の立ちのぼる香炉 (fuming censers) や、全質変化 (transubstantiation) 等のカトリック的事物にも彼は異常な興味を示す。中でも、「天使のパン (*panis caelestis*)」や、「キリストの身体としての聖餅 (wafer)」という表裏複合 (duplicity) こそは特に意味深長であり、それが彼自身の二重生活(ダブルライフ)を鏡のように象徴的に映し出す。また、神への冒瀆になることも厭わず、想像の世界の儀礼として、彼はカトリックの祭儀に参加する。冷たい大理石の上に跪(ひざまず)き、Dorian は「厳粛な」法衣を着た司祭を見つめるが、その司祭が白い手で聖櫃 (tabernacle) の幕を静々と引く行為は、まるで Dorian を誘惑しているかのようにも見える。(110; chap. 11)

この章では、Wilde の最も愛好した聖人のひとりである St. Sebastian (の肖像メダル) のことが出てくることも興味深い。(117; chap. 11) ―― 聖痕烙印 (stigmatization) と陶片追放 (ostracism) の時代において、St. Sebastian は、「gay の聖人」であった。Diocletian (ディオクレティアヌス帝：A.D.245–313) 統治の時代 (A.D.284 – 305)、St. Sebastian はキリスト教徒の兵士たちを救出しようとしたため処刑されたのだが、そのとき彼は自らのキリスト教信仰を告白した。このカミングアウト・ストーリーが、*The Grave of Keats* (1877) を書く上で Wilde を鼓舞(インスパイア)したことは、十中八九、間違いない。

St. Sebastian は通常、有名な Guido Reni の絵 (c. 1616) 等において無数の矢に射られた姿で描かれているが、その絵は、「全ての「矢」が彼の身体を貫いている」にもかかわらず、あるいはむしろ逆に、「全ての「矢」が彼の身体を貫いている」がために、「無上の至福」を経験しているように見えるのである。[12]

続いて、この章の中で登場する、"yellow book" も注目に値する。そして、gay / queer study 的観点からすると、"yellow book" は J. K. Huysmans の *À Rebours* (1884) と想定することが最適となる。なぜなら、それは、「Dorian と女性」の項で前述した、「Sibyl Vane エピソード」の解釈を補完してくれるからである。――*À Rebours* の中で考察に値すべきは、ある夜、性欲が回復した主人公 Des Esseintes がサーカスの女性軽業師に目をつける場面である。(chap. 9) "miss Urania" という名のその女性 [13] は、鋼(はがね)の筋肉をもつ、実に masculinized された身体をしているのである。元々異性愛者(heterosexual)であるにもかかわらず、Des Esseintes は、彼女の逞しさ

に見惚れるうち、自らの幻想の中で、一種の「人工的性転換」が彼女に生じるのを見る。即ち、最初「女」だった彼女は、まず「半陰半陽」(l'androgyne; 206) になり、遂には完全に「男」へと変貌する。生気がなく弱々しくなっている自分が「女性化」している印象を拭いきれない主人公は、彼女とそのような「転換した性交渉」が行われることを倒錯的に空想しては興奮する。Des Esseintes は意を決して彼女を口説き、それに成功するが、後に、その女性の中には「男性の精神」など微塵もなく、その性質が非常に「女性的(feminine)」なことに気づき、失意のまま彼女と別れる。(201-14)

かくして、Dorian と Des Esseintes 両者にとって、Sibyl と miss Urania には、彼らが各々畏怖し、忌み嫌う筈の「女々しさ (femininity)」が表れていると言える。——Dorian は、Sibyl と「恋愛中」のときでさえ、アルカディア (Arcadia) 的世界の「牧歌的心的状態」の中へと逃避し、「僕は London にいるってことを忘れていたよ、19 世紀にいるってこともね。僕は、かつて誰も見たことのない森の中に恋人とふたりだけでいたんだ」、と語る。(65; chap. 6) 一方、Dorian が読んでいる、*À Rebours* を擬した本の中の、Des Esseintes とおぼしき主人公は、「彼自身の世紀を除いたあらゆる世紀に属するあらゆる情熱と思想形態を 19 世紀において実現する」ため、ルネサンスへと精神的に逃亡する。(104; chap. 10) そして著者 Wilde 自身が、この小説を書いた時、「他の時代」を喚起していたことも注目に値する。(*Letters* 352) ——以上のように、*À Rebours* から *Dorian Gray* に対して流れ込んだ影響は記念碑的に大きいと言える。なぜならそれは、「Dorian は一冊の本に毒殺されてしまった」(123; chap. 11) とまで記されているからである。

続いて、同章から作品全体に通暁する古典的事物の考察へと移る。——*Dorian Gray* という作品は、"low art" であると同時に、"high art" でもある。これは学術的仲介がなくとも楽しめる物語である一方、同時に学問的論評に値する資料を豊富に提供してくれる。この特徴は今迄考察してきた第 11 章に特に顕著であり、"academic disply" とでも言うべき現象が表出している。ここで引用されている書物のひとつとして、Nero の寵臣 Gaius Petronius の諷刺小説 *Satyricon* (1 世紀頃) が目を引くが、その本の主人公たちは皆、bisexual (両性愛者) である。また Dorian は、Tiberius、Caligula、Domitian、Nero、Elagabalus 等のローマ皇帝たちについても熟読する (121-22; chap. 11) が、彼らも常軌を逸した性愛行為に耽っていたことは有名である。[14] また、*Dorian Gray* の第 1 章に遡ると、Basil が Dorian のことを Antinous に譬えているが (13; chap. 1)、このとき作者の頭の中には、Hadrian (ハドリアヌス帝：A.D.76-138) が寵愛した、この美しき稚児のこと

が浮かんでいたのは当然であろう。

Byrne R. S. Fone によれば、「(19 世紀において) ギリシャ・ローマ古典文学の文脈への歴史的・文学的・神話的連想は、どれもが、同性愛的内容のシニフィアンとなっていた」という。(90) また Richard Dellamora は、古典ギリシャ世界に存在していた「成人男性が少年を対象とする男色行為 (pederasty) の制度」を絵画や著作で紹介することを "Dorianism" と呼び (！)、1890 年代にそれを紹介する作家たちは、世紀末的雰囲気の中、「破滅的黙示録への恐怖 (fears of catastrophic apocalypse)」に直面しながらも、男性同士間の欲望という主題を語る上で魅惑的に訴えかける献身的な論法をとっていたということを詳述している。(43-46)

すると、Dorian に父親がいないという設定も、この問題の検証に適していると言える。なぜなら彼の置かれた状況は、ギリシャの「少年愛 (paiderastia)」と近似しているからである。それは、年上の男が、少年の代理父 (surrogate father) として振舞うものである。——Dorian の代理父を自称するがごとき Lord Henry には子供がいないし、Basil Hall*ward* (強調筆者) [15] も、自分を Dorian の後見人 (guardian) と見なしている。当然、「率直さ (candour)」や「純粋さ (purity)」の中にいた Dorian (17; chap. 2) は、より多く人生経験を積んだ年上の男性の影響に敏感なのである。

加えて、Basil の Dorian への愛は高度に理想主義的である。——「我々芸術家の心には見えざる理想が美しい夢のようにとりついて離れないが、君は僕にとってまさにその見えざる理想の目に見える具現となったのだ」(強調筆者)、と Basil は Dorian に告白する。(95; chap. 9) この表現は純粋に Platonism を反映していると言えよう。なぜなら、理想の形態を表現しようと芸術家が試みる行為の究極形であるイデア (idea) は、最初のうち魂によって感知されていたが、地上に降りてくるうちに、失われてしまったもの、と説明されうるからである。

Platonism が「同性愛」を喚起するのは言うまでもないが、それを Wilde は *The Portrait of Mr. W.H.* (1889) の中で賞揚している。[16] また、前述した、古代ギリシャにおいて高潔な男性と年下の男性との間に見られた同性愛、paiderastia の習慣は、異性愛より高尚とされていた。ただ、それは肉体的な交わりより、精神的な繋がりに重点が置かれていた。例えば、Plato の *Symposium* における Alcibiades の演説では、Socrates はいつも年下の美少年を愛し、これに夢中になっているが、常に気高く、克己心に満ちていることが強調されている。(222-29) これにしたがえば、Wilde が理想としていた同性愛の形は、古典ギリシャにおけるそれと同種のものとも考えられよう。よって、Wilde が自らの分身の一つであると自

白した主要登場人物の一人である Basil（*Letters* 352）が Dorian に、「Socrates 対 Alcibiades 的関係」を求めていたことは明白であるとも言えるのである。

第 6 に、*Dorian Gray* の結末とモラルの観点からの考察を行う。── この小説は、主要キャラクターが皆各々、「儚く散っていく」物語であることは前述したが、結局、この小説では悪徳（vice）は罰せられることになるが、逆に、美徳（virtue）が必ずしも報われることにはなっていないようである。これこそが、19 世紀の「moralistic な大作」の系譜の中に *Dorian Gray* を含めることの妥当性を疑わしくする部分のひとつである。

最後の数頁に至るまで、Dorian の人生は繁栄する。彼の美と性的魅力があらゆる場所で人を捉えるからである。それにもかかわらず、Dorian は悲嘆にくれる。そして、Basil、Alan Campbell、James Vane という順に、Dorian に改心を呼びかける者が皆死んだ後で彼に影響を与えるものは、彼の「魂」だけとなってしまうが、Dorian の「魂」は、本人から分離して肖像画に入り込んでいるから、この時点で Dorian と肖像画は、2 つで 1 つの「実体」を共有していることになる。だからこそ、一方は、他方によって破滅していかなければならなくなるのである。

物語の最後に Dorian を消滅させることにより、作者 Wilde は、（執筆当時、「秘密裡」にではあったものの）「不道徳な同性愛者」という、社会から（間接的に）負わされていた筈の咎を有する、自らの「実存」を払拭しようと試みたのではないか。また、ビクトリア朝の文学では、女性キャラクターの方が男性キャラクターよりも多く自殺しているようであるが、この件に関し Eve Sedgwick は、*Dorian Gray* のクライマックスを、「感傷癖（sentimentality）をもつ、女性中心主義的なビクトリア朝文学の典型的解釈を破壊する、自殺の非女性化（defeminization）」と見ているようである。（*Epistemology* 141-57）

また、「同性愛の描写」は、どのように作品を構築しようと、当時だけでなく現在でも読者全員の共感を呼ぶことができないのかもしれない。そこには、我々の住む現代社会においてさえも根強く存在する homophobia（同性愛嫌悪）への対峙の問題も取り沙汰される。そして、Basil の「同性愛」は彼の最も精緻な芸術を創り出し、Lord Henry の Dorian に対する「代理父的な愛」は、彼の最もパワフルな「哲学」をも創り出すが、Dorian の友愛はどれも一方通行的偏愛に過ぎない。また一般に人は、ひとつの恋から醒めると、その欲望が他の人間へと向かうのが自然である。しかし Dorian は、Narcissus の如く自分自身を強烈に愛してしまったがため、激しい自己嫌悪という「深淵」へと落ち、果てに「自殺」という形で身

を持ち崩す。結末近くで Dorian は、このような自己偏愛的（narcissistic な）「囚われの罠」を悲痛にも告白する。即ち、「僕に他人を愛することができたらいいのだけど〔…〕ところが〔…〕僕はあまりにも自分自身に集中しすぎている。僕という人格がぼくには重荷となってしまった。僕は逃げ出したいんだ」（169; chap. 18）、と語ることになるのである。

結語

最後に結語として、この小説の全体的な「在り方」を考察する。── これまで述べてきた事柄を統合すると、*Dorian Gray* は、Modernism の高い調子を有していると考えられる。即ちそれは、「（社会の全体的統一化に反する）機能不全（dysfunctionality）」、「企ての失敗（failure）」、「諂い／中傷（sycophancy）」、「挫折（frustration）」等の要素が、同作品中に相当数見受けられるからである。

Dorian Gray が本当に英国の最初の Modernist novel と呼べるのかどうかという議論は、批評家により多少意見は異なるが、Joyce や Lawrence や Woolf のような作家たちが 20 世紀の最初の四半世紀までに探求することになるのと同様の問題に、この作品が触れていることに異論を唱える批評家は殆どいないようである。(17) 即ち、Wilde がこの小説の主要キャラクターたちを描出するときに示したものは、「人間の欲望」であり、「人間の心理的欲求」であり、「人間のあらゆる脆弱性」だったと言えるのである。また、*Dorian Gray* のテーマは、「際立った消費」や「都市生活の快楽」という、20 世紀的な関心事を先取りし、近代化の初期の在り方にも照準を合わせている。── 我々は、Dorian が友人たちと外で食事をし、観劇に行き、阿片窟を訪れ、田舎の猟友会に入ること等を目撃するが、それはビクトリア朝中期の「偉大な」長編小説群とは対照的である。Dorian は決して働かないし、仕事についても語らない。彼の生活に生気を与えているものは、19 世紀末より以前の小説の多くが主題としていた、義務と個人的な充足感との間に存在する緊張感や、金銭と道徳観念の間にあるしがらみ等とは、かけ離れている。実際、*Dorian Gray* は典型的に「Wilde 的なもの」、即ち Wilde なら書きそうだ、と予期される類の作品と言えるであろうし、伝統的なビクトリア朝的価値観が慣習的に現れていると見なされるものとは正反対なものだとも言えるであろう。

このように、*Dorian Gray* が「他者である」ことの意味は、この作品が有している解釈上の開放性や多義性という性質にも顕著である。つまり、この作品は、どんなに単純かつ単一な読み方をしようとも、読者の心中に何らかの「抵抗感」を喚起させるが、それこそが、Joyce や Woolf 等の本格的な Modernist fiction の先駆

者であると見なすことを可能にするものだと言えるのである。この作品を解釈する上で我々読者が感じざるを得ない、この「抵抗感」こそは、本稿で考察してきた、ニュアンスや当てこすりによる提示しかないものの、作品中で絶えず示唆されていることが判明した「男性同士間の欲望」という主題に対し、Wilde には明確な興味があったことを裏書きするものでもあるだろう。そして同時に、この作品は、「美少年愛の理想」という、当時の Wilde の心中を支配していたものに基づく、学術的な意見を含めた、「趣味と意見の集大成」であったとも言えるのである。

—Notes—

＊本稿は、2009 年 12 月 5 日、慶応義塾大学・日吉キャンパスで開催された日本ワイルド協会第 34 回大会のシンポジウム、「『ドリアン・グレイの肖像』を再読する」において行った口頭発表を、加筆・修正したものである。

尚、本稿のテクストとしては、最新版 Authoritative Text である、Michael Patrick Gillespie, ed., *The Picture of Dorian Gray: Authoritative Texts, Backgrounds, Reviews and Reactions, Criticism*, Norton Critical Edition, 2nd ed., by Oscar Wilde et al (New York: Norton, 2007) を使い、論考は全て同作品の final version である 1891 年版を元に行う。*Dorian Gray* のテキストの引用頁は同書からのものである。

(1) *The Picture of Dorian Gray* の variorum version から final version への改変については、Joseph Bristow, Introduction, *The Picture of Dorian Gray*, vol. III of *The Complete Works of Oscar Wilde*, xi-lxviii; Donald L. Lawler, Backgrounds, *The Picture of Dorian Gray*, Norton Critical Edition, 1st ed., 238-87, "Keys to the Upstairs Room: A Centennial Essay on Allegorical Performance in *Dorian Gray*," *The Picture of Dorian Gray*, Norton Critical Edition, 1st ed., 431-57, 及び、"Oscar Wilde's First Manuscript of *The Picture of Dorian Gray*," *The Picture of Dorian Gray*, Norton Critical Edition, 2nd ed., 423-33; Isobel Murray, "Some Elements in the Composition of *The Picture of Dorian Gray*," *Durham University Journal* 64, no. 3: 220-31 等を参照。

(2) Wilde の、「私は人生には天才を注ぎ込んだが、作品には才能しか注ぎ込まなかった」等の多くの有名な警句がそのことを裏書きしている。

(3) Wilde 作品の自叙伝的解釈は、古くから存在する読み方だが、昨今の文学研究動向では軽視されがちであった。しかし、その読み方が、また見直されつつある。Ian Small と Josephine Guy のコンビの著書、*Studying Oscar Wilde: History, Criticism, and Myth* (2006) で明らかにされた主張がそれで、現代の文学研究理論の「常識」に照らしてもユニークである。彼らは、Wilde の永続的 "personality" と、文学的長所の間で生み出される特質を明らかにしたいと、主張する。が、そのとき、「文学テクストは単に言語による芸術品としてのみ見るべきだ」とする、New Criticism や脱構築等による理論的主張は、読者が作品を体験するとき妥当性が見出せないと、断言するのである。(7)

(4) 「花は自分にとって欲望の一部である」とまで Wilde は言う。Wilde, *Letters* 576 を見よ。

(5) が、一方で Basil は後に、Dorian が自らの放縦さを世の男性たちに向けていることへの十分過ぎるほどの証拠を提示するが、そのとき、もちろん彼には「口にできないこと」を腹蔵なく話すことなどできないのである。(126-27; chap. 2)

(6) Walter Pater, "A Novel by Oscar Wilde," *The Picture of Dorian Gray*, Norton Critical Edition, 2nd ed., 373 を参照。

(7) 著者 Wilde 自身、娼婦を買った経験があることはよく知られており、それが彼の梅毒感染の原因であるとも言われているが、彼は "panthers" (獰猛な者たち) と自ら名付けた娼婦たちと享楽に耽ったことは賢明にも隠そうとしていた。

(8) この段落は、Michel Foucault, *La Volonté de Savoir*, Histoire de la Sexualité, vol. 1 (Paris: Gallimard, 1976) を参照。

(9) この名前はギリシャ神話の中で、Zeus のために酌をした Troy の美少年に由来する。

(10) A. C. Bradley が、*Shakespearean Tragedy* (1904) の中で指摘しているように、Shakespeare の悲劇の多くは、その真ん中にクライマックスがある。(61) 同様に、この小説も、final version 完成時に、ほぼ中央にクライマックスがあるように仕立て上げられた。

(11) 因みに、Wilde と Douglas が、例の致命的な裁判 (1895) に臨む直前に、二人で Algiers に行っていたことはよく知られている。

(12) これは Melissa Knox の有名な指摘である。(80)

(13) Urania とは、Plato の *Symposium* において、Pausanias が Aphrodite への献辞(トリビュート)を語る演説中に登場する、男性のみにあずかる女神の名である。それによると、Urania 女神に鼓舞(インスパイア)された男性のエロスは、「愚昧なる」女性にではなく、「優良な」男性へと向かうことになるのだという。そして、これにより古代ギリシャの paiderastia (少年愛) が首肯され、後にその形容詞 "uranian" は、"homosexual (同性愛者)" を表す語ともなった。

(14) それらローマ皇帝の名を Wilde は、手紙の中でしばしば暗号名として使っていた。*Letters* 577, 604-05 を参照。

(15) "ward" という語には、「防護 (guard)、見張り、監督、保護；未成年者が後見されている状態」等の意味があることに注意。

(16) Oscar Wilde, "The Portrait of Mr. W. H.," *The Complete Works of Oscar Wilde*, ed. J. B. Foreman, 1174. 及び、Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, 298 参照。

(17) Michael Patrick Gillespie, Preface, *The Picture of Dorian Gray*, Norton Critical Edition, 2nd ed., x-xi.

— **Works Cited** —

Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy*. 1904. Rpt. London: Penguin, 1991.

Bristow, Joseph. Introduction. *The Picture of Dorian Gray*. Vol. III of *The Complete Works of Oscar*

Wilde. xi-lxviii.

Dellamora, Richard. *Apocalyptic Overtures: Sexual Politics and the Sense of an Ending*. New Brunswick: Rutgers UP, 1994.

Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamish Hamilton, 1987.

Fernandez, Dominique. *Le Lapt de Ganymède*. Paris: Éditions Grasset and Fasquelle, 1989.

Fone, Byrne R. S. *A Road to Stonewall: Male Homosexuality and Homophobia in English and American Literature, 1750-1969*. New York: Twayne, 1995.

Fortunato, Paul L. *Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*. New York: Routledge, 2007.

Foucault, Michel. *La Volonté de Savoir*. Histoire de la Sexualité. Vol. 1. Paris: Gallimard, 1976.

Greenblatt, Stephen. *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*. 1988. Oxford: Clarendon Press, 2001.

Guy, Josephine, and Ian Small. *Studying Oscar Wilde: History, Criticism, and Myth*. Greensboro: ELT Press, 2006.

Huysmans, Joris Karl. *À Rebours*. Collection Folio. 2nd ed. 1977. Cher: Gallimard, 1991.

Knox, Melissa. *Oscar Wilde: A Long and Lovely Suicide*. New Haven: Yale UP, 1994.

Murray, Isobel, "Some Elements in the Composition of *The Picture of Dorian Gray*." *Durham University Journal* 64, no. 3 (June 1972): 220-31.

Nelson, Claudia. "Sex and the Single Boy: Ideals of Manliness and Sexuality in Victorian Literature for Boys." *Victorian Studies* 32 (1989): 525-50.

Plato. "Symposium." *Lysis, Symposium, Gorgias*. Trans. W. R. M. Lamb. Loeb Classical Library 166. Cambridge: Cambridge UP, 1925. 80-245.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.

_____. *Epistemology of the Closet*. 1990. Berkley: U of California P, 2008.

Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. New York: Columbia UP, 1994.

Ulrichs, Karl Heinrich. *The Riddle of "Man-Manly Love": The Pioneering Work on Male Homosexuality*. 2 vols. Trans. Michael A. Lombardi-Nash. Buffalo: Prometheus, 1994.

Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Intro. Vyvyan Holland. 1966. London: Collins, 1990.

_____. *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. London: Rupert Hart-Davis, 1962.

_____. *The Picture of Dorian Gray*. Vol. III of *The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. Joseph Bristow. Oxford: Oxford UP, 2005.

Wilde, Oscar et al. *The Picture of Dorian Gray: Authoritative Texts, Backgrounds, Reviews and Reactions, Criticism*. Norton Critical Edition. 1st ed. Ed. Doald L. Lawler. New York: Norton, 1988.

_____. *The Picture of Dorian Gray: Authoritative Texts, Backgrounds, Reviews and Reactions, Criticism*. Norton Critical Edition. 2nd ed. Ed. Michael Patrick Gillespie. New York: Norton, 2007.

『ドリアン・グレイの肖像』と『ざくろの家』を読む
――肖像、鏡を中心に――

池 田 祐 子

序論

The nineteenth century dislike of Realism is the rage of Caliban seeing his own face in a glass.

The nineteenth century dislike of Romanticism is the rage of Caliban not seeing his own face in a glass. (Wilde 17) [1]

『ドリアン・グレイの肖像』（1891）の序文において、ワイルドは同胞を醜悪なキャリバン[2]に例え、写実主義とロマン主義の両者に皮肉を浴びせている。その裏には、人は誰しも鏡の中に自身の理想の姿を見出したいものであるという、ワイルドの思想が透けて見える。『ドリアン・グレイの肖像』は、肖像という鏡に映った自分に翻弄されるキャリバンたちの寓話である。そして、鏡を見る者はワイルドにおける普遍的なテーマである。本論では『ドリアン・グレイの肖像』を皮切りに、『散文詩』（1894）、『ざくろの家』（1891）に登場する鏡の機能の考察を試みる。

1

『ドリアン・グレイの肖像』における「内面が外面を変化させる」という発想は、19世紀後期に隆盛を誇った人相学や骨相学の影響が見える。チャールズ・ダーウィンは『人及び動物の表情について』（1872）の中で、人間の心理と動物的行動の連続性を論じた。ダーウィンに傾倒したチェザーレ・ロンブローゾは、人間の身体的・精神的特徴と犯罪の相関性を論じた『犯罪人論』（1876）を出版した。文学においては、ロバート・ルイス・スティーブンソンの『ジキル博士とハイド氏』（1886）の第二人格であるハイドが、性格に呼応して容貌も醜く変化